

10【街の散策からの気づき発見】

加藤楸邨・知世子句碑と春日部高校

会員 K.T.

過日、街の散策で「加藤楸邨の旧居跡」を見たことから、春日部高校の校内にある加藤楸邨の句碑を見たいと思い、街の散策を兼ね、訪ねた。句碑は平成13年(2001)市民の憩いの場として校内に誕生した地域開放広場を記念して春日部高校同窓会が建立したもの、という。

「木の葉ふりやまず、いそぐないそぐなよ」と詠まれている。俳句の教科書の解説によると、この句は昭和24年(1949)の句集『起伏』に収録されている句で、現代風に解釈すると、

「はらはらと舞い散るこの葉がとまらない。いそぐな、いそぐなよ。」という、こたらしい。楸邨はこの時期、肋膜炎を患い、寝たり起きたりの療養生活を送っていた。病を得て思うように動けない自分へのもどかしさ、と戦後復興に向けて動いていく社会への思いを詠んでいると、俳書では解説されている。

加藤楸邨(かとう しゅうそん・1905～1993)については以前、春日部郷土資料館を見学した際、資料館編集『夏季展示(第41回)俳人 加藤楸邨と粕壁』平成22年(2010)の冊子コピーをいただき、読んでいたので記憶に残っている。

楸邨の資料を探してひもとき、咀嚼して引用する。
「楸邨の本名は加藤健雄、日本の近代・現在を代表する俳人の一人で、松尾芭蕉の研究者としても知られている。

粕壁とのご縁は、昭和4年(1929)卒業後、旧制粕壁中学校(現県立春日部高等学校)に教員として赴任し、昭和12年(1937)までの8年間の教師生活を過ごした。この時代に同僚に進められ、俳句を始めるようになり、雅号を「楸邨」とした。当時粕壁に月2回ほど来ていた水原秋桜子と親交を持ち、秋桜子主催の『馬酔木』に参加、次第に頭角を現した。昭和12年教員を辞し、俳句の道に進むことを決意し、東京文理科大学国文学科(現筑波大学)へ進学する。昭和15年(1940)に自らの俳誌『寒雷』を創刊・主宰した。生涯で12の句集を刊行、「人間探究派」の俳人として知られている。」

句碑の広場を挟んだ学校入口側に、もう一つ句碑がある。

この碑は、1992年(平成4年)に山梨県小淵沢町に建立された加藤楸邨記念館の落成を祝って、「寒雷」の楸邨の門弟たちにより建立されたもの。同館が平成13年(2001)閉館したことに伴い、現・春日部高校に移された、とある。苔むした岩に刻まれた句は、楸邨夫婦の直筆といわれる。側に看板があり、移設の経緯と楸邨・知世子夫妻の句が記されている。知世子は知らなかったもので、ネットで調べると、吉川千早 著『加藤知世子論—俳句という光』という、評論があった。知世子も著名な俳人であったようだ。夫婦句碑の解釈を調べる。

落葉松はいつ目ざめても雪降りるをり 楸邨

この句は昭和25年(1950)12月、楸邨が病後に長野県の星野温泉を旅した時に詠んだもの。「落葉松はいつ目覚めても雪が降っていることだ。」「落葉松」が擬人法、「いつめざめても」とは環境の変化のなさ、「雪」と「落葉松」の美しい世界と併せて、人間の寂しさを詠っている、という。

寄るや冷えすぎるやほのと夢たがへ 知世子

この句は悪夢を良い夢に変えてくれる力があるといわれる法隆寺の夢違観音を詠んだもの。近寄れば、金銅の仏体の冷ややかさが肌身に伝わるが、離れれば、何かほのかなものにわが身も包まれる。そのほのかなものとは、仏の心の温もりのようなものだろうか、という。解説を読んで、改めて句を読むと、そういう思いが詠まれているのか、と俳句の奥深いことを思う。俳句の文芸は今日も、春日部市と楸邨を繋げている。

